

第3回翻訳者育成事業（翻訳コンクール）講評

○英語部門審査講評

審査委員会では当初、今回の応募作品は全体として、過去2回に比べ、翻訳の質が若干落ちているのではないかという感想も述べられましたが、これは当然ながら、これまでと違って選択の許されない課題作の湛える独特の難しさに由来するのかもしれない、そうした比較が容易にできるものでないことは言うまでもありません。実際、審査の過程で明らかになったのは、翻訳において、原文の正確な読解と行間への深い洞察の双方が求められ、なおかつ訳文としての英語の冴えも期待されるのはいつものことであるにしても、今回の課題となった両作品の場合、そのハードルがかなり高かったのではないかということでした。

正確で見事な訳文と思いがけない誤読による訳文、或いは工夫を凝らした明晰な訳文とひどく生硬な訳文の混在が、最終選考に残った11篇のなかにもかなり散見されたという事実が、課題作の難しさを雄弁に物語っていたように思われます。まずテキスト全体を読んで、その世界を自分なりに理解、構築し、浮き彫りにするべき状況、場面がどのようなものであるのかを見定めたうえで訳文を完成させ、さらにその後で、例えば音読によってリズムや話法を含む表現の不協和音を探し当てて推敲を重ねるといった努力が、これまでの課題以上に必要であったのかもしれない。

しかしながらそんな中で上位3作が満場一致で比較的短時間のうちに決定したのは、この3作が課題テキストへの読み込みの深さに支えられた情景の喚起力、訳文の正確さと格調の点で傑出していたからに他なりません。最優秀作の決定に当たっては、したがって、この3作を比較検討することになりました。半ば繰り返しになりますが、課題作の「蛾」と「銀座アルプス」はかなり肌合いの違うテキストであり、正直なところ、候補作それぞれに得手、不得手があるように見受けられたというのが正直なところです。

前者は見慣れた日常世界と不気味とも言える領域の共存、もしくは日常に侵入してくる非日常を、さりげなくも陰翳のあることばで描いているところに味わいがあり、後者がかなり自由に紡ぎ出す回想は多少とも当時の日本および銀座についての知識を読者に要求します。翻訳対象として、これほど趣の異なった作品はかなりの難物であると言えるでしょう。上位3作はそれにもかかわらず、それぞれの個性を発揮しながら見事な翻訳作品となっています。心から拍手を送りたい。その上で、訳文の丁寧さ、正確さとイメージの豊かなふくらみを総合的に判断して最優秀作を決定しました。受賞された方にはおめでとうございまして申し上げますと同時に、翻訳もまた文学作品である以上、対象テキストと翻訳者の間にはいわく言い難い相性とでもいったものが存在するという思いを、今回はとくに深めたこともあわせて申し添えます。

審査評は以上で尽きますが、いつものことながら、審査委員一同、一つのオリジナルに対する複数のヴァージョンを味わいながら、文学テキストに織り込まれた意味の広がり、多義性を改めて感じることができました。応募してくださった方全員に感謝いたします。応募作を読むのは楽しみであり、評価するのは苦しみですが、楽しみが苦しみにまさっていることは申し上げるまでもないでしょう。ややもするとことばが軽視されるきらいのある今日、これからもことばに、そして日本文学に関心のある多くの方が、苦しみをいろいろな翻訳に挑戦してくれることを願って止みません。そのときにはきっと苦しみ以上に楽しさを味わっているはずですから。

マイケル・エメリック
スティーヴン・スナイダー
ジャニー・バイチマン
高橋和久

○フランス語部門審査講評

何よりもまず、江國香織「蛾」と寺田寅彦「銀座アルプス」という、時代も文体もまったく異なる二作の翻訳という今回の難題に挑戦し、一定の成果を結実させた応募者全員の健闘をたたえたいと思う。

江國の短篇が、簡潔で含みのある文章を駆使し、男女の感情の亀裂の根元に不穏な生きものの臭いをたきしめているのに対し、寺田のエッセイは、科学の論理を装いつつ、そこからあふれた情感を巧みにすくいあげている。繊細さのうちにしぶとさを含みもつ前者と、骨太な論旨の進行に独特な繊細さをただよわせる后者は、翻訳に関してそれぞれ別様の困難をはらんでおり、その両者ともどもを一人の訳者が上手にこなすのが、非常な難事であることは言うまでもない。結果として、日本語の文章を正確に読解する能力においても、フランス語によって適切な文体を創出する能力においても、きわめて高度な水準が求められることになった。

奨励賞となったフランソワ・ブランジェ氏は、両作のどちらをも平均以上のまとめ方でこなしている。難を言えば、「蛾」では文体がやや冗長にすぎ、「銀座アルプス」では翻訳というより解釈にとどまる箇所が散見されたことだろうか。ただし、成長の見込める余白も感じられた。

おなじく奨励賞のアナイス・ファルジャ氏は、崩れのない穏やかな文体で、バランスも悪くないが、「蛾」においてしばしば原典から離れすぎる印象を受けた。「銀座アルプス」については、他の候補者と比べてやや不自然な箇所や脱落があるのが気になった。資質として、「蛾」のような文章の翻訳のほうに向いているのではないか。

ともあれ、ブランジェ氏もファルジャ氏も、訳文に丹念な工夫の跡が見られ、処理の上手さに膝をうつ箇所がいくつもあった。今後、さらにトレーニングを積み、読書体験を深めることで、優れた翻訳者に成長してゆくことが期待される。

優秀賞となったバンジャマン・ジルー氏の訳文は、両作の文体の違いを巧みに表現することに成功している。「蛾」の翻訳の文体は全体にわたって滑らかで原作の空気をよく伝えており、突出した魅力はないかわりに、堅実で自然な言葉の流れを感じさせる。さらに見事な成果を挙げているのは「銀座アルプス」のほうであり、そこでの文体創出のセンスには、並々ならぬフランス文学の素養が感知される。とくに、一種プルーストふうの冒頭部分（このエッセイの要をなす部分である）からの「掴み」の処理は鮮やかである。

ただし、ジルー氏が優れた資質を備え、これほどまでに「書ける」翻訳者であることを認めたい。ただ、だからこそたいへん残念に思わずにいられないのは、丁寧に辞書さえ引けば避けられたはずの大小の誤訳があちこち散見されることだ。今後の精進を望みたい。

今回、最優秀賞は該当作なしという遺憾な結果に終わったが、それは冒頭に述べたような課題の難度の高さのゆえでもあろう。この結果に臆すことなく、次回以降、もっと多くの方々が本コンクールに挑戦し、翻訳の技倆を競っていただきたいというのが、審査員全員の心からの希望である。

コリーヌ・カンタン

アンヌ・バヤール＝坂井

堀江敏幸

松浦寿輝